入試改革の理念と現実

学術から考える英語教育問題
ーCEFR、入試改革、高大接続ー

2019・03・23

石井洋二郎

入試改革の理念

- 「大学入学者選抜については（・・・）高等学校教育で培ってきた力や、これからの大学教育で学ぶために必要な力を評価するものとなっていない。そうした背景には、年齢、性別、 国籍、文化、障害の有無、地域の違い、家庭環境等の多様な背景を持つ高校生一人ひとりが、高等学校までに積み上げてきた多様な経験や能力を度外視し、１８歳頃における一度限りの一斉受験という画一化された条件において、知識の再生を一点刻みで問う問題を用いた試験の点数による客観性の確保を過度に重視し、そうした点数のみに依拠した選抜を行うことが「公平」であるという、従来型の「公平性」の観念が社会に根付いていることがあると考えられる」（中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」、2014年12月22日）

センター試験は「知識偏重」か？

- マークシート式なので「１点刻み」で採点されるが、問題内容は「知識の再生」を要求するものではなく、どの科目も思考力をじっくり問うような、よく練られた問題が工夫されている
- 採点が「１点刻み」であるからといって「知識偏重」であるとは限らない

定員管理の厳格化と入試の現実

- 入学定員管理の厳格化によって、定員を超えて入学者を受け入れてしまうと、予算が削られてしまう
- 選抜試験である以上、1点刻みの評価は「必要悪」である
- 「主体性評価」の点数化は、逆に主体性の喪失につながりかねない

「１点刻みからの脱却」と定員問題

- 1点刻みの選抜試験から脱却するためには、大学の入学定員を柔軟化しなければならない
- 一方で1点刻みの入試は良くないと言い、他方で大学の入学定員を厳密に守れと言うのは、根本的な矛盾である
- 問題なのは数値化することそれ自体ではなく、数字がそのまま人間の価値そのものを測定する基準であるかのように誤解されてしまうことである

英語入試改革の出発点

- 自民党教育再生実行本部の第2次提言：「TOEFL等の外部試験の大学入試への活用の推進」を主要施策の１つに（2013年4月）
- 経済同友会の政策提言「実用的な英語力を問う大学入試の実現を」：「大学の英語入試において、実生活でのコミュニケーションに必要な「聞く」「話す」「読む」「書く」の4つの技能を総合的に測定する外部資格試験を活用する」（2013年4月）
- 第2期教育振興基本計画：「大学入試においても、高等学校段階で育成される英語力を適切に評価するため、TOEFL等外部検定試験の一層の活用を目指す」（2013年6月）

民間試験導入の問題点

- 目的も方法も異なる複数の検定試験を大学入試の一部として用いること
- 地域格差や経済格差
- CEFRとの対照表の信頼性
- 問題や解答の公表
- 出題と試験対策の利益相反
- スピーキングテストの実施上の問題

目的と手段の倒錯

- 大学入試に民間試験を活用することで高校の英語教育を変えようという発想で、今回の改革が進んできた
- 目的から手段へ、ではなく、手段から目的へ、という倒錯が生じたことが問題

秋入学問題との相同性

秋入学	英語民間試験
現状認識：東大生は海外経験が乏しく、国際性の点で劣っている	現状認識：日本人は英会話が苦手で、外国人と自由にしゃべれない
秋入学に移行する ⇩	大学入試に民間試験を導入する ⇩
欧米諸国と学事暦が一致する ⇩	高校の英語教育が変わる ⇩
留学がしやすくなる ⇩	４技能がバランスよく養われる ⇩
学生の国際経験が豊かになる	日本人の英語力が向上する

必要条件の連鎖

学生の国際経験を豊かにする

↓

海外留学をしやすくする

↓

学事暦を欧米の諸大学とそろえる

↓

秋入学に移行する

十分条件の連鎖

学生の国際経験が豊かになる

↑

海外留学がしやすくなる

↑

学事暦が欧米の諸大学とそろう

↑

秋入学に移行する

英語入試改革のロジック

日本人の英語能力が向上する

↑

英語の４技能がバランスよく養われる

↑

高校の英語教育が変わる

↑

大学入試に民間試験を導入する

「十分条件の連鎖」で考える人の特徴

- **自分の主張がそのまま「必要十分条件」であると勘違いする傾向がある**
- **「正解は１つではない」と言いながら、「自分のたどっているルートだけが唯一の正解である」と信じて疑わない**
- **手段に対して疑義が呈されると、目的それ自体を否定されたと思い込む**

受験生は改革の実験台ではない

- 「当面従来のセンター試験で十分なので何もしない」という「ゼロの選択肢」も代案の１つ
- 「改革はとにかく実行に移し、何か問題が出てきたら走りながら修正すればいい」というのが推進者の決まり文句
- 入試に関しては話が別であり、受験生を制度改善のための実験台にしてはならない

多様性を度外視しているのは？

- 「大学入学者選抜については（・・・）高等学校教育で培ってきた力や、これからの大学教育で学ぶために必要な力を評価するものとなっていない。そうした背景には、年齢、性別、 国籍、文化、障害の有無、地域の違い、家庭環境等の多様な背景を持つ高校生一人ひとりが、高等学校までに積み上げてきた多様な経験や能力を度外視し、１８歳頃における一度限りの一斉受験という画一化された条件において、知識の再生を一点刻みで問う問題を用いた試験の点数による客観性の確保を過度に重視し、そうした点数のみに依拠した選抜を行うことが「公平」であるという、従来型の「公平性」の観念が社会に根付いていることがあると考えられる」（前掲：中教審答申）

最適の「必要十分条件」に向けて

- 今回の英語入試改革の最大の問題は、一部の人たちが十分な検証を経ることなく基本方針を決定し、民間試験の導入を起点とする「十分条件の連鎖」で事を進めてきたこと
- 理念と現実の乖離から生じた「目的と手段の倒錯」を是正して、議論を本来の筋道に戻さなければならない
- あくまでも学術的なエビデンスに基づいて、所期の目的を実現するための「必要十分条件」を模索すべきである